

八戸におけるハリストス正教会の成立と展開

―受洗者名簿の記録から―

山下 須美礼

はじめに

本稿は、明治初期の短い期間に、北東北を中心に広く受容されたハリストス正教会について、主として八戸に誕生した教会とその設立の中心となった信徒の活動に注目し、それらを地域の社会関係の中で読み解くことにより、その受容のあり方を明らかにしようとするものである。

ハリストス正教会とは、東方正教（ギリシャ正教）の教義と典礼を奉ずるキリスト教の一教派の、日本における組織の総称である。日本には、幕末ロシア領事館の置かれた箱館^①を窓口^②に、ロシアよりもたらされ、領事館付き司祭であったニコライによって、日本における伝教が企図された。その後、初期の信徒となった元仙台藩士らを中心に伝教が進められたことにより、その故郷である旧仙台藩領一帯に多数の教会が築かれ、さらには仙台と函館、仙台と東京の往来に沿った町々に伝教が拡大されていったのである。明治十二年（一八七九）のハリストス正教会の信徒数は、旧仙台藩領と、「南部」と称される旧盛岡藩領を主とする地域を合わせて、二千人を越えていた（図1）。プロテスタント諸派の受容が、大都市からそれぞれの地方都市へ、いわば点と点を結ぶ形で広がって

いったのは対照的に、このハリストス正教会の展開は、北東北の太平洋側を、地続きに、面的に波及していったことが特徴的であったと言える。八戸は、その拡大の北東端に相当する。

八戸は、旧藩時代においては、盛岡藩から分離した二万石の小藩、八戸藩が置かれた城下町であり、その藩領は三戸郡と九戸郡にまたがる。盛岡藩は大南部、八戸藩は小南部と呼び習わされ、「南部」という一つの地域として見なされてきた。明治維新の後、三戸郡の八戸藩領を除いた地域は、盛岡藩領であった北郡、二戸郡と共に弘前藩の管轄下に入ることになるが、抵抗が激しく、その後黒羽藩の管轄を経て、三戸郡となり、会津藩が斗南藩として転封してきた後は、斗南藩の管轄となった。そして廃藩置県を経て、明治四年（一八七二）九月、弘前県・黒石県・斗南県・七戸県・八戸県・館県の合同により成立した青森県の一部として、新たな出発をするのである。八戸におけるハリストス正教会の受容は、このような旧藩以来存在する地域同士の対立・協調関係や、維新以降の新たな行政区画における葛藤が、複雑に影響し合う状況の中で進められたと捉えられよう。

八戸のハリストス正教会は、明治九年（一八七六）十月七日に司祭が

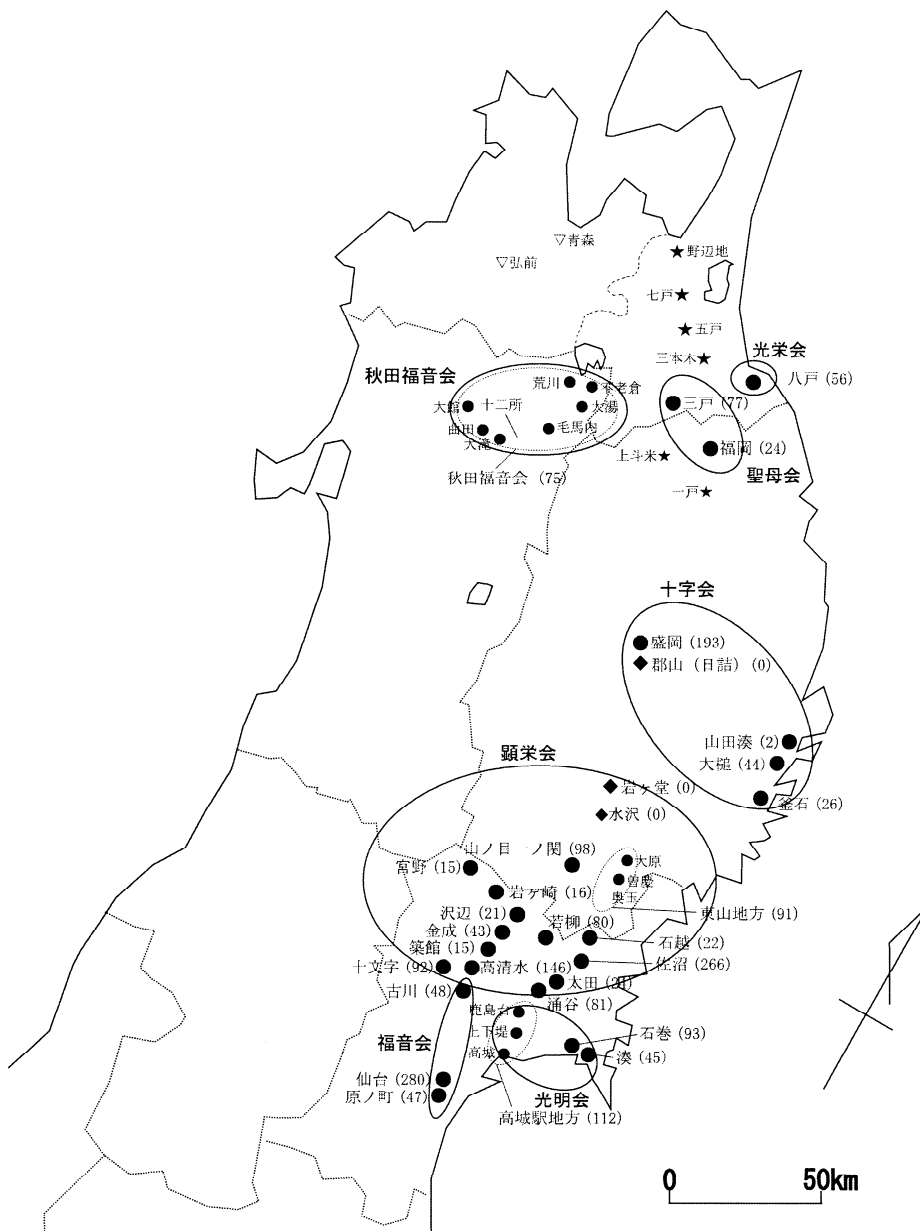


図1 北東北におけるハリストス正教会の分布と信徒数（明治12年7月）

- ：教会の所在地 ◆：信徒はゼロだが、教会として教えられている地域
- 破線楕円：複数の地域で一教会を形成
- 太線楕円：伝教区の範囲 ゴシック文字：伝教区の名称
- カッコ内：信徒数
- ★：八戸周辺の伝教先 ▽：青森県内の主要都市

「大日本正教会議事録」（明治12年 盛岡ハリストス正教会所蔵）により作成

来訪、希望者が洗礼を受けたことよって成立、八戸光栄会と称された。続けて九日にも洗礼が行われ、「(受洗者名簿) 八戸光栄会」⁽⁴⁾には、この二日間で二十六名の人物が洗礼を受けたことが記録されている。この二十六名の筆頭に名を記すのが、パウエル源晟という人物である。

八戸におけるハリストス正教会の受容に関しては、同時期に起こった「産馬騷擾事件」への信徒らの関与という観点からの、工藤欣一⁽⁵⁾や黒田吉則⁽⁶⁾による言及があるほか、八戸におけるハリストス正教会の信徒の集団が、地域社会からはみ出したことにより、かえって指導性を発揮し得た、という佐藤和夫⁽⁷⁾による指摘がある。これらの先行研究では、パウエル源晟をはじめとする八戸のハリストス正教会の信徒らは、「産馬騷擾事件」に代表される自由民権運動との関わりの中で検討がなされてきた。本稿では、彼らの教会活動に焦点をしぼり、彼らがハリストス正教会を受容した背景とその活動の実体を提示することにより、それらの活動が維新後の八戸という地域社会にあつて、どのような意味を持つものであったのかを明らかにしたいと考える。

一 八戸光栄会の誕生まで

幕末、箱館のロシア領事館付司祭として来日したニコライは、日本における東方正教の拡大を使命と考え、禁教下の箱館で、来たるべき布教に備えていた。⁽⁸⁾ 明治元年(一八六八)、土佐の浪人沢辺琢磨が三名に、密かに洗礼を授けた後、翌明治二年(一八六九)にロシアへ一旦帰国、日本伝道会社を設立し社長に就任した。一方仙台藩領には、幕末にニコ

ライと接触した仙台藩士らによつて、東方正教についての情報がもたらされていた。その結果、数名の仙台藩士族らがニコライを頼つて函館に渡り、ニコライが留守の中、沢辺らと共に書物による東方正教の勉強を始めたのである。⁽⁹⁾

明治四年(一八七一)、再び函館にやつてきたニコライは、早速彼らに教理を伝え、洗礼を施した。そして彼らの中から三名を伝教者として仙台へ派遣すると共に、その拠点を函館から東京に移し、本格的な伝教を開始した。しかし、未だ「キリシタン禁制」の状況下、明治五年(一八七二)仙台と函館では、役人による大規模な取り締まりが行なわれ、伝教者として「窘逐」⁽¹⁰⁾に遭遇した多くの仙台藩士族らが、自宅謹慎の処分を受け、旧仙台藩領の各地に散在するそれぞれの旧知行地に預けられたのである。しかしこの処分は、かえって旧仙台藩領内の各地に東方正教の教えを広めるきっかけとなり、また仙台ではニコライの尽力により「窘逐」が終息、仙台福音会が成立する結果となった。

明治六年(一八七三)に「キリシタン禁制」の高札が撤去され、伝教活動は一層加速し始めた。明治七年(一八七四)には、伝教方針を決定する第一回の公会がニコライのもとで開催されるとともに、伝教を支える人材の育成を目的とした正教神学校と伝教学校が設立された。さらに翌明治八年(一八七五)には最初の信徒であるパウエル沢辺琢磨が司祭に叙聖され、日本人で初めて領洗資格を取得した。パウエル沢辺は早速、旧仙台藩領を中心とする各地に誕生していた洗礼希望者のもとを巡回し、洗礼を授け、佐沼や清水など各地で教会の設立を導いた。

このような伝教の伸展の中で、「南部」地域はどのような位置づけに

あつたのであろうか。一九〇一年にハリストス正教会が編んだ教団史である『日本正教伝道誌』においては、「南部地方の布教線は、当初の教役者が、函館より陸路盛岡・仙台等を経て東京に往来するの間に、其便宜によりて三戸・福岡・七戸・八戸・野辺地等の地方に於て、布教を開始し、次第に東漸して盛岡に及びたり」とされ、拠点であつた函館と仙台、そして東京の往来の通り道として、早い段階で必然的に布教が始まつたと理解されている。また、具体的な伝教者の動きとしては、「イブアン酒井は、昨年⁽¹²⁾の十二月を以て、八戸地方の伝道を命ぜられ、既に函館を去りて、南部地方に至り、八戸・福岡・三戸間に在りて、福音を伝へ居りし⁽¹³⁾」という記述が見られ、明治六年には八戸や福岡（現岩手県二戸市）、三戸といった南部地域の町々において、伝教が行われていたことが確認できる。

一方明治六年十二月十三日、第十七中学区取締北村礼次郎と松尾紋左衛門から青森県五戸支庁史生吉田茂に対し、「異教」者へ反省を促し、その反省を示す証書を提出させることが上申された。これに関する一連の文書によると、この「異教」者とは、「東京ニコライ門人」を指しており、「南部」地域に対するハリストス正教会の伸展が、官吏の警戒の対象となつていたことがわかる。調査の委任を受けた北村と松尾は十二月十六日付で、当十二月中三戸には、ニコライ門人の仙台士族「大嶋」が教員として滞留していたが、すでに盛岡へ出立したこと、そして彼の伝教のもと、「社中」となつた者が十二名おり、そのうち三戸の八名、斗南の一名は反省証書を提出することを約束したが、ほか三名は函館教会へ「入社」したため証書は提出しないと述べたことを報告している。

同時に、新たに入手した三点の情報についても伝えている。その一点目は「函館教会社」より「耶蘇教員」四名が当地方の伝教に派遣され、八戸・三戸・五戸・七戸の伝教を行なつていゝものである。そこには、「八戸伝道師」として「酒井某」が派遣されていることが明記されており、先述の『日本正教伝道誌』におけるイオアン酒井についての記述と合致する。二点目として、東京のニコライが旧南部地方への伝教を強化しようとしており、岩手県での教会設立は必至、当県への影響も避けられないこと、三点目には仙台における迫害では、ニコライが政府に談判して捕縛を解いたことが報告されている。これらのことから、明治六年の段階で、三戸や八戸など青森県に属する「南部」地域には、函館や仙台から多くの伝教者が派遣され、伝教活動を行なつていたこと、そしてその中心となつていたのは三戸で、官吏の警戒を促すほどの人々が、その伝教の影響を受けていたことが判明する。

さらに明治七年三月十七日付で、北村と松尾は、青森県権令池田種徳に対し、「耶蘇教ノ儀ニ付奉建言候事⁽¹⁴⁾」として、意見の上申を行なつてゐる。その内容は明治六年十二月十六日付の情報とほぼ同様である。この建言の目的は、「政教一体ノ政事上」に「障碍」となる耶蘇教の排除であり、「人心ノ疑惑スル所」を取り除くことにあつた。しかしこれは北村ら独自の危機感ではなく、十二月十六日付の文書において「兼々御配意之事ニ付⁽¹⁵⁾」という表現が見られることから、青森県や五戸支庁の中において、それ以前からハリストス正教会の拡大に対する警戒が課題として挙がつており、それを反映してのものであつたと考えられる。函館では、ハリストス正教会の伝教者と教導職との間で度々摩擦が生じ、開

拓使が厳しい態度でその收拾に臨んでいたが、それらの情報が北日本の伝教地域に伝わり、同じ危機意識が共有されたことが想像できる。この一連の働きかけにより、「反教員追立候旨」が決定され、青森県に属する「南部」地域での伝教活動は、困難な状況となった。

しかしその後、学区取締が北村らから岩泉正意に代わるることによって、明治八年「反教員追立」が取り下げられた。岩泉正意とは、盛岡藩の藩校日新堂で洋学の泰斗大島高任に学んだ、八戸藩の洋学の第一人者であり、また八戸藩に伝わる和算の、真法賢流和算の最後の伝承者でもあった。明治五年には蛇口胤親に働きかけ、英語と洋学の塾である開文舎を開かせ、自らも教鞭を振るった。パウエル源晟は、八戸藩の藩校で岩泉より洋学や数学を学び、十三番目の受洗者となるマルク関春茂は、この開文舎における岩泉の教え子であった。ここから明治九年（一八七六）十月の八戸光栄会の設立までの経緯は明らかにし得ないが、「公会議事録 明治九年」¹⁸には、盛岡の伝教を担当していたパウエル円子による「八戸ノ地ハ教ヲ望ム者アリテ切ニ伝教人ヲ望ムナリ」という発言に引き続き、パウエル丹野による発言が次のように記されている。

「史料一」

パウエル丹野云フ、我レ函館ニ在ル時三戸ヨリ来書ニハ、誰カ公会ニ出ル人陸行シテ八戸三戸ヲ顧ミルコトヲ述フ故ニ、此度彼ノ地方ニ臨ムナリ、三戸教会ハ宜キ景況ナリ、又八戸伴美丸ト云フ者、甚タ尽力スルノ様子ニテ已テニ教会ヲ立ントセリ、彼ノ地ノ況ヲ見ルニ、善キ伝教者行クナラハ盛ニナルベシト思ハル

この公会は明治九年の七月に開かれているので、これは八戸光栄会が誕

生する直前の報告である。この記載に登場するパウエル丹野は、明治八年九月より函館の教会に派遣されているので、この一年の間に、後に八戸の教会で二番目の受洗者となるペートル伴義丸からの手紙を受け取ったものと考えられる。明治九年に教会の設立を見るまで、密かに準備を進め、時期を見極めていたことが伺われる。また、八戸で最初の受洗者となるパウエル源晟は、この時期頻繁に盛岡などを訪ねており、教会設立までの働きは大きいと考えられるが、パウエル源についての詳細は、次章以降で述べたい。さらにこの公会の記録によると、「三戸教会ハ宜キ景況ナリ」と報告されていることから、「南部」地域においては、八戸に先駆けて、三戸に教会が成立していたことが判明する。三戸聖母会と称したこの三戸の教会の中核となったペートル川村らは、明治六年十二月に反省証書を提出した九名の中にその名が見出せるが、形式的に証書を提出したものの、その後も密かに機会を待ち、教会を設立したものと推測できる。

二 教会誕生時の信徒——「パウエル源」を筆頭として——

明治九年（一八七六）十月七日、八戸をパウエル沢辺司祭が来訪、二日間で二十六名の人物が洗礼を受け教会が成立し、八戸光栄会と称されることとなった。この教会誕生時に洗礼を受けた最初の二十六名の信徒達とは、どのような背景を持つ集団であったのであろうか。その手がかりとなる（受洗者名簿）八戸光栄会（以下「名簿」と略す）という史料が存在する。この史料は、八戸市史編纂室に委託された「関家文書」

の一つで、二〇〇四年に八戸市史編纂室のご厚意により、筆写を許可していただいたものである。この「名簿」は、ハリストス正教会においては「メトリカ」と呼ばれる所属信徒の記録簿である。「名簿」は野線等が印刷された既成のものであり、教会設立と同時に本会より渡され、国内のハリストス正教会全てで同様の帳簿に記録したものと考えられる。

「第一部洗礼」「第二部婚配」「第三部死者」の三部構成になっており、記述に粗密が見受けられるものの、明治九年十月の八戸光栄会設立から、一番新しいもので大正十二年（一九三七）二月まで、記録が続いている。そのうち「第一部洗礼」は、「受洗月日」、「受洗者属籍、身分、父姓、名前、称、年齢、及ヒ前宗旨」、「授洗者ノ姓名」等の九個の項目から成り立っている。この「第一部洗礼」の、最初のページから名を連ねている二十六名が、八戸光栄会の最初の信徒達となる。この「名簿」の記載から、その特徴を検討する（表1）。

はじめに属籍は、二十六名中二十一名が士族、五名が平民と記載されている。二十一名の士族は城下の武家の住まいのあった柏崎新丁や、城下に隣接する糠塚村などに居住し、五名の平民は商家が立ち並んでいたという二十八日町や塩町、大工町に居住していた。性別は、男性が二十五名、女性是一名である。この唯一の女性は、マリヤ源ヒデといい、受洗者の筆頭に記されるパウエル源晟の長女で、年齢は六歳、最年少の受洗者でもあった。後にこのマリヤ源の夫になるアンドレイ久保珪蔵も、十四歳で同じく二十六名の中に名を連ねている。年齢構成は、十四歳以下が五名、十五〜十九歳が十二名、二十代が七名、三十代が一名で、無記載が一名分ある。これらのことから、二十代、三十代の数人の士族出

表1 八戸光栄会誕生時の受洗者

	受洗者	聖名	受洗日	居住地	属籍	性別	年齢	前宗旨
1	源 晟	パウエル	明治9年10月7日	八戸町字柏崎新丁	士族	男	26	禪宗
2	伴 義丸	ペトル	〃	八戸町字山ノ下	〃	男	24	神宗
3	受洗者 3	ペトル	〃	八戸町字長根	〃	男	19	真宗
4	受洗者 4	パウエル	〃	八戸町	〃	男	20	浄土宗
5	受洗者 5	ルカ	〃	八戸町	〃	男	18	禪宗
6	受洗者 6	アフアナシイ	〃	三戸郡糠塚村	〃	男	20	禪宗
7	近 藤 賢四郎	マトフェイ	〃	八戸町馬場丁	〃	男	35	神宗
8	受洗者 8	パウエル	明治9年10月9日	八戸町	〃	男	21	浄土宗
9	受洗者 9	イオアン	〃	八戸町字鳥谷辺丁	〃	男	20	禪宗
10	受洗者 10	イオアン	〃	三戸郡糠塚村	〃	男	19	禪宗
11	久 保 忠 勝	イヤコフ	〃	八戸町字柏崎新丁	〃	男	17	禪宗
12	受洗者 12	ペトル	〃	三戸郡糠塚村	〃	男	18	禪宗
13	関 春 茂	マルク	〃	三戸郡糠塚村	〃	男	19	禪宗
14	白 井 毅 一	パウエル	〃	三戸郡糠塚村	〃	男	19	禪宗
15	受洗者 15	アンドレイ	〃	八戸町字柏崎新丁	〃	男	18	浄土宗
16	受洗者 16	ヒリップ	〃	八戸町字柏崎新丁	〃	男	15	浄土宗
17	受洗者 17	ステファン	〃	八戸町字山伏小路	〃	男	17	禪宗
18	受洗者 18	イウステン	〃	八戸町字稲荷町	〃	男	10	真宗
19	源 希 子	マリヤ	〃	八戸町字柏崎新丁	〃	女	6	禪宗
20	久 保 珪 蔵	アンドレイ	〃	八戸町柏崎新丁	〃	男	14	禪宗
21	受洗者 21	イサイヤ	〃	三戸郡浜通村	〃	男	15	—
22	受洗者 22	アレキサンドル	〃	八戸町字大工町	平民	男	17	禪宗
23	中 埜 徳次郎	オニシム	〃	八戸町字大工町	〃	男	20	禪宗
24	受洗者 24	アキラ	〃	八戸町字廿八日町	〃	男	—	—
25	受洗者 25	ステファン	〃	八戸町字塩町	〃	男	12	真宗
26	受洗者 26	スピリトン	〃	八戸町字廿八日町	〃	男	10	浄土宗

※氏名は本文中に登場する信徒のみ明示した。

「(受洗者名簿) 八戸光栄会」により作成

身の指導者によって、教会設立が牽引されたことが想像できる。この二十六名の中には、衆議院議員となったパウエル源晟を初めとして、後に政治に関わっていく人物が数名確認できる。

この受洗者の筆頭に名前を記すパウエル源晟とは、どのような人物であったのだろうか。源晟は、嘉永三年（一八五〇）八戸藩御祐筆河原木弥兵衛の第九子として八戸に誕生、幼名を滝蔵といった。¹⁹ 幼少時は藩校に通い、漢学を修め、また岩泉正意より数学や洋学を伝授された。明治三年（一八七〇）、後に一緒に洗礼を受けさせた長女ヒデが誕生している。源晟の妻はサメといい、その姉は八戸出身の教育者羽仁もと子の義理の祖母に当たる。²⁰

長女が誕生した翌年の五月、源晟は台ノ温泉への湯治願いを出し八戸を出発する。その台ノ温泉において、改めて修学のための上京願いを提出するが、その許可が下りる前に無断で東京へ出立したため、東京藩邸で一週間の謹慎処分を受けた。しかしその後源は、八戸藩が正式に東京遊学を許可していた留学生と同様の処遇を受けることが許され、そのまま東京にとどまり、八戸藩主の菩提寺であった金地院内の屋敷を宿として、修学先を探し始めた。²¹ その間、明治四年（一八七二）七月には、戸籍法公布に伴う戸籍簿の編成に際し、名前を河原木滝蔵から源晟に改めている。「源」は、河原木家の所在する八戸市河原木に伝わる義経伝説から取ったと言われている。²² また、河原木家の菩提寺である八戸市類家の廣澤寺には、源晟の墓と共に河原木家代々の墓が安置されているが、文化八年建立の墓石には「河原木五郎兵衛源宗翁」、明治期に建立の墓石にも「河原木舎源朝臣宗布」と刻まれているのが確認できる。²³ このこ

とから、一族が以前から使用してきた「源」の名に対する愛着と誇りが、晟にこの名字を選ばせたことが推測できる。一方「晟」の文字には、日光が満ち満ちる様、物事が盛んになる様という意味があり、今後の人生への抱負や志を託したと考えられよう。この改名は、新たな人生の展開に対する意気込みの反映であったと捉えることができる。このとき、源晟は二十一歳であった。しかしその直後の同年九月、周辺四県との合同により八戸県は消滅、青森県に編成された。そのため、八戸県として留学生に学費等を支給することが不可能になり、留学生達は藩邸より八戸までの旅費を渡され、志半ばで帰郷せざるを得なくなったのである。源晟も例外ではなかった。

明治四年に不本意ながら帰郷した後数年の源晟の動向は明らかにしないが、数少ない動静の一つとして、八戸藩校が廢藩置県により改称して誕生した文武学校において、洋学の教師を務めたというものがある。²⁴ この学校で、源晟は唯一の洋学教師として、百五十名の生徒を教えたという。この事実は、その背後に岩泉正意という師匠による引き立てや支えがあったことを想像させるとともに、僅か四ヶ月に過ぎなかった東京滞在の中でも、貪欲に新しい知識を吸収してきた源晟の姿を表しているとも言えよう。

一方で源晟は、代言人として活動していたとされる。²⁵ ただし、この時期は未だ代言人規則も定まっておらず、職制として確立していたものではなかった。また、源晟がいわゆる代言人として、どこでどのような問題に携わったのかも殆ど明らかにしえない。しかしこの時期の源晟が、青森県に対して「建議」を行なっている事実がある。明治八年（一八七

五)二月十五日に、青森県参事塩谷良翰に対して提出した建議書^④において、源晟は三点の具申を行なっている。一つは、「副戸長壹名及組頭ヲ廃スルノ議」として、余剰と考える副戸長一名と組頭の廃止を求めるものであり、二点目は、「五戸支庁ヲ八戸江転スルノ議」として、八・九・十大区を管轄する支庁を、五戸から八戸へ移すことを提案するものであった。そして三点目は、「妓税ヲ増スノ議」として、芸妓や貸座敷渡世の者に高い税を掛けることで、その生業からの脱却を促し、それでも営業するものが出た場合は、その税金により貧学院を開くことを提案するもので「游食ノ民少ナク不学ノ子弟ナキニ至ル」ことを目的とするものであった。

これらの「建議」の中で興味深いのは、一つ目の議題において、「国ヲ富サントスル者ハ其本ヲ固シ、其国民ヲ化ニ趣カシメントスル者ハ其教ヲ以テ本ト為スト、其教未ダ立ズ」と記し、国民を教化するには「教え」が必要であるが、その「教え」は未だ定まっていなと述べていることである。この時代、国民教化の施策は、明治五年に定められた教導職制度のもと、教導職らが「三条教則」や「十一兼題」に則った説教をすることによってすでに進められていたが、源晟は、それを「国民ヲ化ニ趣カシメントスル」教えとは捉えていない。しかしながら、東方正教の教えこそがそれを担うものであるとの主張も、未だなされておらず、源晟が「国民ヲ化ニ趣カシメントスル」教えを必要と考え、模索していた状況が読み取れる。さらに、三つ目の議題においては、「常職ナキ者之ヲ游民ト云」とし、その「游民ノ尤ナル者ハ芸娼妓ノミ」と捉え、「游食ノ民多キトキハ国乱ル」ことから、前述の通り、高い税を掛ける

ことで、その生業からの脱却を促し、芸娼妓を減らすことを提案している。ここに示されているのは、あくまでも自分を社会の指導的立場に想定しての発想と捉えることができ、この時期の源晟は、そのような立脚点から、社会の様々な問題に対して関心を持ち、世の中に働きかけていこうとしていたことが読み取れる。

またこの「建議」中には、「二三年前以前宮城岩手ノ間閒游ヒシ」という記述があることから、動向を詳らかにしない明治四年以降の数年間に、宮城県や岩手県の各地を回り、見聞を広げていたことが判明する。これらの地域ではハリストス正教会の伝教が盛んに行なわれており、源晟がそのどこかで教えに触れる機会を得、関心を抱いたことは容易に想像できる。そして伴義丸という熱心な同志を得、文武学校で源が洋学を教えた十代の士族の子弟や、師匠の岩泉正意が関わる英語塾開文舎で学ぶ関春茂などの間に、徐々に賛同者を増やしていったと考えられる。そしてそれが明治九年(一八七六)十月の八戸光栄会の設立へとつながっていったのである。

三 伝教者としてのパウエル源

明治九年(一八七六)十月に洗礼を受け、八戸光栄会の成立を果たしたパウエル源は、その後上京し、東京本会のロシア人司祭ニコライのもとで、伝教者となるべく教義の勉強を開始した。その結果、翌明治十年(一八七七)七月の公会において、パウエル源は伝教者サワ山崎のもと、副伝教者として八戸に派遣されることになった。

パウエル源が副伝教者として八戸に戻った直後の九月に、パウエル源の母ヤヨが死亡した。ヤヨは死の直前洗礼を受け、八戸光栄会最初の死者として「名簿」に記録されている。葬儀はパウエル源が自ら執行し、類家村廣沢寺に埋葬された。

翌年の明治十一年（一八七八）四月から、パウエル源は単身下総地方の伝教に赴く。佐倉を拠点として伝教活動を開始し、その状況はハリストス正教会の機関紙である『教会報知』⁽²⁷⁾に逐次報告された。具体的な伝教活動の様相は、宿の一室を借りて昼夜数回に分けて聴聞者を集め、新旧聖書の講義をするというものであり、伝教の開始当時は、毎回二三十名の聴聞者があつて盛況であつたが、五月に入ると該地は茶摘の季節になり、来訪するものが激減したという。⁽²⁸⁾時にはプロテスタントの伝道者と鉢合わせすることもあり、その状況については「新教伝道者モ来リ居レリ、是レモ同ク来聴スル者寡キ様子ナリ、過日又タ米国人クリイন্তカ云者来リ、説教ノ節ハ七八十名来聴セシ者アレトモ、是レモ矢張り西洋人ノ髭デモ見ル積リテ来リシ由ナリ」と報知している。⁽²⁹⁾

その後、同年七月の公会では、パウエル源は秋田地方の伝教に派遣されることと決定した。ここである秋田地方とは、毛馬内・十二所・大館・久保田を指すとされ、かつては盛岡藩であつた鹿角郡から秋田藩領の日本海沿いまで、秋田県の北部を東から西まで広く担当するものであつた。この派遣の際、本人には九円三十銭、八戸の家族には六円が東京本会より支給されてお⁽³⁰⁾り、パウエル源は家族と離れ、伝教に従事していたことがわかる。

久保田に拠点を定めたパウエル源が直面したのは、連日に渡る執拗な

妨害であつた。講義のたびに「神学連」が妨害に現れ、「彼ノ連中十余名、罪子ヲ取り巻キ既ニ飛掛ラントスル勢ニテ、罪子等立タントセバ、膝ヲ押エ立タセズ甚タ困迫ノ際、巡查三名来リテ之ヲ諭セトモ、之ヲ禁シケレトモ、一向聞入レス乱妨ヲ極メタリ、故ニ毎モ説教央バニシテ終レリ」という状況であつた。⁽³¹⁾妨害はさらに激しくなり、とうとう宿屋への放火騒ぎにまで発展した。

「史料二」

罪子ノ宿ニテ若シ強テ罪子ヲトメ置ナラバ放火セント処々ニ張札致セルヲ以テ、宿主大ニ恐懼出シ所ヲ知ラズ（中略）其夜二三ノ神官ト思シキ人物来訪シテ咄中、烟硝ノ薫リ甚シキ故、罪子ハ勿論家内一統周章スルモ、来訪セシ者ハ依然知ラザル者ノ如シ、或ハ云風邪ニテ香ヲ聞カスト、夫ヨリ罪子家根ニ登リテ得心ニ至ルマデ探索スレトモ怪シキ者ヲ見ズ、宿亭ノ長男周輔ナル者又タ家ノ四周ヲ探索シテ隣家小屋ト境セル処ノ椽ノ下ノ甚タ薫リ甚シキヲ以テ伏シテ之ヲ伺ハ、豈図ランヤ、綿ヘ烟硝ト硫黄トヲ灌キホウグチヲ入レ之ヲ円メ火ヲ其中ニ入レ之ヲ椽ノ下ヘ投ケ込ミ、既ニ周輔ノ見タルトキハ綿ヘ火ウツリ火気燃々既ニ椽下ノ板ヘ燃付カント、周輔驚愕声■⁽³²⁾及ヒ、罪子ヘ来訪セシ三名モ共ニ警官ニ調ベラレ始末書ヲ差出シタリ⁽³³⁾

「神学連」とは、神道教導職など、神学を後ろ楯にハリストス正教会の伝教を阻止しようとする一派を指すものと考ええる。久保田へ来る以前、下総佐倉での伝教活動においてもパウエル源は警官や教導職からの妨害に遭い、「扱所ニ於テハ教導職二名（僧乎神道職カハ知ラス）ヲ呼出シ、

今般耶蘇教伝道師何某ナルモノ吉田四郎方ニ止宿セリ、行テ討論ノ上彼我曲直ヲ糺ス可キ旨達シタル由、其後僧一人ト俗四五名ト罪子ヲ訪ヒ来³³⁾、ということが起こったことを報告をしている。このように伝教の場では、常にプロテスタント諸派の伝道者や教部省派遣の教導職と出くわし、その活動と競合するだけでなく、時には実力行使を以て、伝教を妨害されていたことが読み取れる。

このような妨害によって、秋田地方ではこれといった成果が上げられないまま、明治十二年（一八七九）七月の公会を迎え、パウエル源は今度は岩手県大槌の伝教者として派遣されることになった。³⁴⁾パウエル源が赴任した明治十二年の岩手県では、馬産への課税廃止を要求する産馬農民の動きが活発になっていた。明治十二年とは、前年の府県会規則の公布に伴い府県議会が開始された年であり、地方自治の確立を目指す動きの中で、地方税のあり方も重要な議論の一つとなっていた時代であった。岩手県が置かれた地域は古くから名馬の産地として名高く、馬産は重要な産業であったが、その課税の方法は未だ封建的貢租の形式と変わりがなく、当時興隆してきた自由民権運動とも結びついて、見直しを求める声が大きくなっていったのである。明治十二年の県議会では、従来の課税方法であった「牧畜仕法金」の在り方について、集中的に議論がなされた。それと連動する岩手県の自由民権運動は、前年の明治十一年に鈴木舎定が自由民権結社「求我社」を結成し、その運動は「盛岡民権派」とも称され、周囲への影響力を増していた。

一方八戸には、自由民権結社の性格を持つ「暢伸社」が明治十三年（一八八〇）四月に結成された。この主要メンバーは、マルク関春茂、

パウエル白井毅一、アンドレイ井河元寿など、ハリストス正教会の信徒と、パウエル源晟と同様に岩泉正意の弟子であった奈須川光宝、八戸師範分校でマルク関を教えた浅水礼次郎、マルク関と開文舎や八戸師範分校で同級であった成田芳雄らであった。結成当時、パウエル源は大槌に在り、結成メンバーには数えられないが、その後八戸に戻ると同時に加わっている。

この結成の直前、同年の一月に青森蓮華寺（青森市本町）で、青森県内の自由民権運動の集会有り、本多庸一らの弘前民権派に加えて、野辺地、七戸、五戸といった南部地域の自由民権運動家も集い、憲法制定の請願を行なっているが、三戸郡からの参加は中樞にはなかった。³⁵⁾一方同年十一月の第二回国会期成同盟大会では、求我社の鈴木舎定が岩手県全郡及び青森県三戸郡、秋田県鹿角郡の総代として出席を果たしている。³⁶⁾

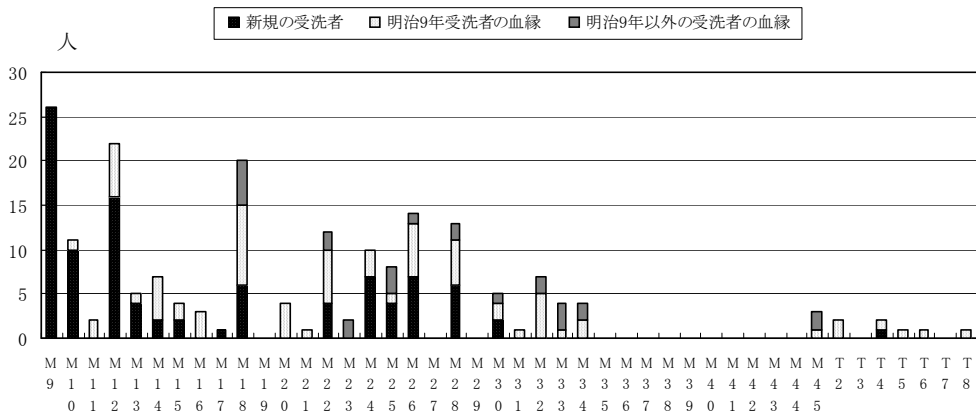
これらのことから、八戸で醸成した自由民権運動につながる動きは、青森県全域に勢力を拡大していた弘前民権派の流れを汲むものではなく、盛岡を中心とする盛岡民権派に属するものであり、暢伸社はその影響下に結成された結社であったといえよう。また、その情報をもたらし、両者を結び付けたのは、他ならぬパウエル源であったと考えられる。彼は大槌に赴任の間、拠点教会のある盛岡はもちろん、岩手県内の各地へ、頻繁に赴く機会が与えられていた。そのような環境の中で岩手県における産馬農民の動きと自由民権結社の活動をつぶさに観察し情報を集め、好意的な印象を持って接触を図ったことが想像できる。また同時に、家族の住む八戸へも頻繁に行き来したことが伺え、その際に仲間達と話し合い、岩手県内の自由民権運動に関する情報を伝え、八戸の自由民権運

動の方向性を示唆していったと捉えられよう。また秋田県鹿角郡も、パウエル源の前任地の一部であり、赴任時の見聞やその後の交流などによつて、この地の自由民権運動についても、彼は状況を把握できる環境にあり、盛岡民権派と結び付いた三戸郡と鹿角郡の自由民権運動の動きには、旧藩時代の属性に加えて、伝教者としてこれらの地と岩手県を往来していたパウエル源の働きが反映していたと考えられる。

四 八戸光栄会の展開

明治九年（一八七六）十月に二十六名が洗礼を受けて教会が成立した後、八戸光栄会はどのように展開したのであるうか。「名簿」に記された、大正十二年（一九二三）までの四十七年間の洗礼者の記録をもとに、洗礼者数の推移を図2に示した。四十七年間の洗礼者の総数は百九十七名にのぼる。明治九年の後、明治十二年（一八七九）と明治十八年（一八八五）には二十名前後の洗礼者があるが、その他は微増である。また、注目すべきは、明治九年以降の洗礼者の多くが、既に洗礼を受けている信徒の家族や親戚といった血縁者であるということである。「名簿」には、先に洗礼を受けた血縁者がいる場合、その続柄が明記されている。明治九年十月に受洗した二十六名に着目すると、その内の十三名は、自分の後に血縁者が洗礼を受けており、彼らの血縁として名を連ねるそれら信徒は全部で八十三名にのぼる。すなわち十三名を起点に拡大した血縁者の数は、「名簿」に登場する洗礼者総数百九十七名の約半数を占めていたことになる。また、血縁者として登場する信徒の続柄の内訳は、

図2 八戸光栄会の受洗者数変遷



「(受洗者名簿) 八戸光栄会」により作成

妻が九名、父が四名、母が三名、子供が五十一名で、圧倒的に子供の場
合が多い。さらに、「名簿」全体で検討すると、自分の後に続いて血縁
者が洗礼を受けている信徒は三十一名を数え、その血縁者は百十四名に
なる。これらは洗礼者総数百九十七名の七十四パーセントに及ぶ。中
でも、夫に続いて洗礼を受けた妻の数は十八名、父親に続いて洗礼を受け
た子供の数は六十五名を数える。

血縁者の内に複数の受洗者を持つ系譜の具体例を提示してみよう（表
2）。信徒Aの系譜は、始点となる信徒Aが明治九年十月の最初の受洗
者の一人である。その後明治十八年に妻と長男、次男が洗礼を受け、二
十一年（一八八八）、二十二年（一八八九）には父と母が入信している。
明治三十二年（一八九九）までに、三男から六男までの四名が洗礼を受
け、大正四年（一九一五）には長男の子供が入信を果たした。最初の本
人を含めて十一名の血縁者が、三十九年の年月をかけて入信したこと
になる。次に信徒Bの系譜では、やはり始点となる信徒Bが明治九年十月
の最初の受洗者の一人であり、その後明治十八年に妻が洗礼を受け、二
十四年（一八九一）から三十二年にかけて五人の子供が入信している。
信徒Cの系譜では、信徒Cの血縁者としてカウントされる弟二人が、そ
の後自分を始点として、その家族を入信させている状況がある。このよ
うな血縁者による洗礼の傾向は、他にも見られる。それは、八戸光栄会
の核となった信徒らが、ほぼ同じ世代に属し、入信の後で妻帯し、子
供が生まれるという共通項を持っているためである。子供の多くは生ま
れてすぐに洗礼を受け、父母や祖父母の入信は、臨終の間際に行なわれ
た場合も多い。それらのことから鑑みると、八戸光栄会の信徒は、最初

に洗礼を受けた二十六名を主軸として、彼らが作り出す家族を中心に構
成されていたものであったと捉えることができる。

そのような構成員で組織された八戸光栄会は、その後どのように教会
活動を展開していったのであろうか。ハリストス正教会の機関紙である
『教会報知』には、明治十一年（一八七八）の復活祭に八十名の人々が
集い、盛況であったことが報じられている。³⁷ さらにその翌日には一同相
談の上、二階建ての会堂を新築することを決定したという。会堂の建築
には全部で二百三十円を要したが、そのうち二百円は八戸の信徒たち
による寄進でまかなわれ、同年十一月六日に完成した。³⁸ 一方八戸を拠点と
して、三本木、野辺地、福岡などへの伝教も活発に行なわれた。明治十
一年十月に、八戸の伝教者であったサワ山崎から次のような報告がなさ
れている。³⁹

「史料三」

（前略） 小子ハ先日公会ニ申上置候通、野辺地駅へ派出伝教仕度、
兄弟ニ相談申候処、八戸ノ儀ハ、ペートル佐藤ヲ以テ伝教幹事ト為
シ、其他アフアナシイ川口、イオアン出町ヲ以テ副輔トシ、当分預
リ居候テモ不都合無之由候ニ付、断然決心仕、一昨九日即チ月曜日
八戸発足、昨十日夕当野辺地へ到着仕候、早速先般話シ懸置候良友
ヲ招キ候処、二人ハ箱館へ出稼キニ罷越、残り二人来集シ、大悦仕
候、尤当止宿家ノ若主人モ志之者ニテ、周旋致呉候積也、然レバ何
トカ一会ヲ聞クニ宜シカルベキヤト奉愚察候、就テハ当月末迄試ミ
度存候、其上ハ兼テ申上置候通、青森町へ派出仕度存候、是レハ八
戸師範分校教員大井氏ノ周旋ニテ、青森二十一人ノ良友ヲ獲ルノ目

表2 血縁者の受洗状況の事例

A

	聖 名	系 譜	続 柄	受 洗 日			受洗時 年齢
				年	月	日	
1	マルク	A	本人	明治9年	10月	7日	19
2	パウエル	A	次男	明治18年	5月	29日	3
3	アンナ	A	妻	明治18年	11月	9日	26
4	イオアン	A	長男	明治18年	11月	9日	7
5	シメオン	A	父	明治21年	1月	6日	—
6	ペトル	A	三男	明治22年	2月	14日	5
7	ダリヤ	A	母	明治22年	3月	2日	47
8	ヒリップ	A	四男	明治22年	3月	2日	1
9	ティモフエイ	A	五男	明治30年	9月	24日	2
10	アフアナシイ	A	六男	明治32年	4月	—	0
11	マリナ	A	孫（長男娘）	大正14年	12月	11日	6

B

	聖 名	系 譜	続 柄	受 洗 日			受洗時 年齢
				年	月	日	
1	パウエル	B	本人	明治9年	10月	9日	19
2	ソフィヤ	B	妻	明治18年	11月	9日	28
3	イオアン	B	長男	明治24年	8月	5日	8
4	ユリヤ	B	長女	明治24年	8月	5日	3
5	ウェラ	B	次女	明治26年	9月	14日	0
6	ナデジダ	B	※	明治28年	8月	13日	81
7	ナデジダ	B	四女	明治32年	4月	—	3
8	リボウ	B	五女	明治32年	4月	—	7
9	マリヤ	B	※	大正8年	3月	10日	85

C

	聖 名	系 譜	続 柄	受 洗 日			受洗時 年齢
				年	月	日	
1	アンドレイ	C	本人	明治9年	10月	9日	18
2	ヒリップ	C	弟（C'）	明治9年	10月	9日	15
3	アキリナ	C・C'	母	明治12年	5月	22日	53
4	マリヤ	C	婚約者	明治12年	5月	22日	15
5	ニカノル	C・C'	弟	明治14年	9月	20日	17
6	アレファ	C	長男	明治15年	2月	4日	0
7	ニーナ	C	長女	明治16年	9月	23日	1
8	アレキセイ	C・C'	弟（C''）	明治18年	5月	29日	17
9	ウェラ	C	娘	明治18年	5月	29日	—
10	シメオン	C・C'・C''	父	明治18年	5月	29日	—
11	ユリアン	C	次男	明治20年	4月	15日	1
12	カルポ	C	三男	明治24年	6月	7日	1
13	ルキヤ	C''	婚約者	明治25年	12月	15日	17
14	アンナ	C''	※	明治26年	5月	15日	—
15	オリガ	C	三女	明治26年	6月	11日	1
16	マルファ	C'	長女	明治28年	6月	10日	3
17	ルカ	C''	息子	明治28年	6月	10日	0
18	アンナ	C	※	明治28年	6月	10日	87
19	イヤコフ	C'	長男	明治30年	6月	13日	0
20	フィリモン	C'	次男	明治33年	—	—	—
21	ホマ	C	四男	大正6年	10月	27日	—

※は、血縁者であることは確実であるが、続柄が明記されていない。

「(受洗者名簿) 八戸光栄会」により作成

途有之候也、且現今「プロテスタント」伝教人、弘前ヨリ出張シ盛ニ弘法仕居候由、就テハ是非共乍不及小子派出伝教仕度存候、小子未学ノ少年ニハ候得共、青森ナレバ箱館神父へ万事相伺フニモ宜シク、前件都合能キ周旋人モ有之候云々、当年ノ内ハ専ラ青森ト野辺地ニ於テ尽力仕度存候、尤八戸ニ急務有之候節ハ何時ニテモ省リミ候事、八戸兄弟モ委細承知ノ事ト云々

ここでは、青森町には八戸師範分校教員である「大井氏」の周旋により、十一名の聴講希望者がいるということから、青森町における伝教が計画されている。青森町では近頃プロテスタントの伝教人が「弘前ヨリ出張シ盛ニ弘法仕居」という状況であり、是非とも伝教を成功させたことの報告であった。「プロテスタント伝教人」とは、本多庸一らを主軸とする弘前のメソジスト教会からの伝道者であり、ハリストス正教会の伝教者とは、伝教先各地で鉢合わせした^⑬。この弘前のメソジスト教会の存在もあって、八戸光栄会は、北東北太平洋側に面的に拡大を続けるハリストス正教会の前線としての様相を呈したが、野辺地・三本木・福岡・五戸・七戸での伝教では、僅かながら成果を挙げたものの、津軽地域への教会設立は、結果として叶わなかった。

一方、八戸市内での伝教も、成立時の勢いは失っていた。明治十三年七月の公会では、八戸の町の人々に対する「人心ハ金財ニアリテ天国ニアルモノ甚タ少シ^⑭」との評価のほか、「神道ナル本家ヨリ窘逐ヲ受ケ田地ヲ没収サレ家ヲ逐ヒ出サントス^⑮」という信徒の状況が報告されている。活動の拠点を自分たちの力で作り上げ、そこから新たな信徒を獲得するべく伝教に力を入れたが、図2にも示した通り、現実には既信徒とその

家族以外に教えを広めることは困難な状況に直面していた。

一方で教義について深く考える中で、八戸光栄会を離脱する信徒も存在した。明治九年十月の最初の二十六名の受洗者の一人であった中野徳次郎は、教義に関する疑問を抱き、仙台でプロテスタントの外国人宣教師と問答を行なった結果、プロテスタントに改宗したという^⑯。そして明治十五年（一八八二）十一月、バプテスト派の八戸浸礼教会を設立した。中野徳次郎は数少ない平民階層の信徒であった。産馬騒擾事件が最も紛糾している時期、その渦中にあつたパウエル源らの活動については後述するが、それらの動きへの連動を困難と感じ、またそのような運動を中心とする教会のあり方に疑問を抱いて、より本質的な信仰の獲得を目指したことが考えられる。

おわりに

パウエル源が八戸の伝教者として帰郷した明治十三年（一八八〇）の秋以降、八戸光栄会は「産馬騒擾事件」の渦中に巻き込まれることとなる。青森県は産馬事業の民間への移管を図り、明治十二年（一八七九）に野辺地、七戸、三本木、田名部、五戸、三戸、八戸の各組から委員を選出して「産馬維持公会」を設立するが、実際の資金運用や事務管理はしばらく県庁へ委託する形をとった。八戸組は、資金運用への不満などから、その産馬維持公会からの分離を願ひ出たが、聞き届けられず、独自に開いた馬市の売上金を差し押さえられるなどの制裁を受けた。この時に分離派の代表として青森県との折衝に当たったのが、パウエル源を

はじめ、奈須川光宝、浅水礼次郎ら、暢伸社のメンバーであった。近隣地域の自由民権の動きに連動して、自由民権的結社の色彩を強めた暢伸社が、産馬騷擾事件への関与を深めていったことによる。八戸光栄会的主要メンバーは、暢伸社の構成員でもあり、教会活動への影響は避けられない状況にあった。

明治十九年（一八八六）、パウエル源は青森県議会議員に初当選し、以後四期務めることになる。それに伴い、翌明治二十年（一八八七）七月の公会をもって、伝教者から退いた。同時にニコライから政界入りを激励するアイコンを贈られ、自由党に入党し、政治家として歩み始めた。パウエル源の周囲では、マトフェイ近藤が下長苗代村長、イヤコフ久保が鮫村長、パウエル白井が大館村長、マルク関が湊村長になるなど、地方政治に身を置く信徒が続いた。明治二十二年（一八八九）には、暢伸社が「八戸土曜会」という政治団体に生まれ変わった。この土曜会に関わるのは、暢伸社に引き続き八戸光栄会の関係者のほか、パウエル源と同様に岩泉正意の弟子であった奈須川光宝をはじめ、その伯父に当たる八戸藩の有力者川勝隆邑や、八戸師範学校でマルク関らを教えた浅水礼次郎、その浅水の師範学校での教え子であり、マルク関とは明治八年に開かれた英語塾開文舎でも同窓であった成田芳雄などであった。開文舎の教師には、斗南の士族である広沢安任が牧場技師として雇ったイギリス人のルセーや、新渡戸伝の三本木開拓の資金援助を行なっていた蛇口胤年の息子胤親がおり、また八戸土曜会とは八戸市政で対立する「公民会」の中枢にあった遠山景三も教鞭を振るっていた。また八戸土曜会は、同年結成の「八戸青年会」を湊要之助と共に運営した北村益を支援した

が、彼らが学んだ栃内吉忠の塾では、マトフェイ近藤が同窓であった。このように、明治初期から中期にかけて、八戸における教育・政治・産業活動に携わった人々は、網の目のように複雑に結び付いていたのである（図3）。

ここで、パウエル源の師匠である、岩泉正意に注目したい。岩泉は、明治七年にハリストス正教会拡大を阻止するために取り決められた「反教員追立」の指示を取り下げ、青森県の南部地域における伝教の扉を開いた人物である。岩泉本人は洗礼を受けることはなかったが、様々な面でパウエル源らを後方より支援した様子が見て取れる。その一つが、明治十年（一八七七）五月にパウエル源晟所有の耕地二反五畝二十一歩を、岩泉正意が五円七十九銭一厘で買い受けている事実^⑬である。これはすでに伝教者として活動を開始していたパウエル源が、経済的な必要性から土地の購入を持ちかけ、それに岩泉が応じたものと考えられる。

パウエル源と同様に岩泉正意の弟子であった奈須川光宝もまた、パウエル源の活動に寄り添っていた様子が見られる。やはり本人が入信することはなかったが、弟は後に八戸光栄会の信徒となっており、「名簿」には「光宝弟」と記されている。本人も明治十二年の復活祭には「会外ノ人」ながら参加し、「是レハ随分当地ニテノ人物」^⑭と評されており、パウエル源とは非常に近い間柄であったことが推測できる。

このように八戸光栄会は、重層的な人間関係が構築されている中に成立し、存在していたと言うことができよう。八戸におけるハリストス正教会の受容は、岩泉を代表とする地域の指導者が藩政時代より培ってきた、新知識の導入や人材育成の土壌の上で行なわれたものであった。彼

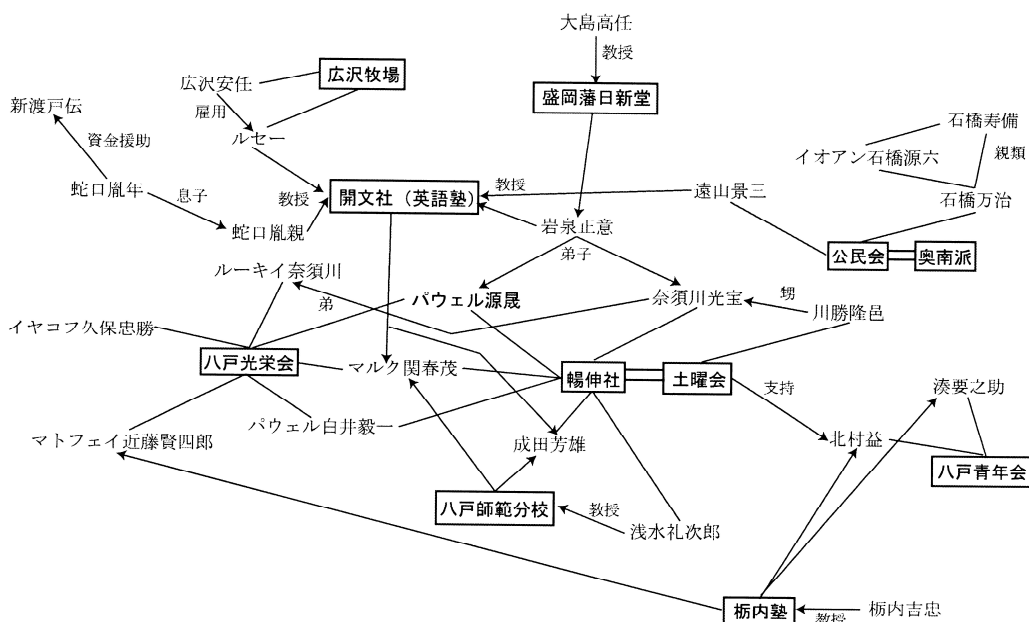


図3 八戸光栄会とパウエル源晟を巡る人物相関図

らのような会外の人々は、ハリストス正教会の持つ進取性や機動力、全国に張り巡らされたネットワークを評価し、自らが信仰を持つには至らなくても、その受容を歓迎し、活動を支援したと考えられる。それは、信仰の有無を超えたところで、新しい時代への対応という大きな問題を、彼らが共有していたからにはかならない。

しかしそのことは、八戸光栄会の存立を政治的な結び付きを基盤としたものとし、教会活動と政治活動が表裏一体のものとなえられる状況に陥った。ハリストアニンとしての彼らが最初に表舞台に立つことになった産馬騷擾事件は、農村における問題であったため、その後の政治家としての彼らは、八戸市街における支持を得難く、同時に新たな信徒を八戸市街で獲得することも困難となった。一方農村においては、彼らは純然たる指導者の立場であり、信仰を共有するべき存在としてはそもそも見做されず、教会が拡大するきっかけとはならなかった。八戸におけるハリストス正教会は、一部の指導者とその周辺の占有物として捉えられ、教会は現状維持にとどまったのである。また、八戸地域の利益を主張する政治的活動が強調されたことは、旧藩境を越えての伝教にも支障をきたした。

一方で信徒らは、東方正教の信仰の内面化を、自らの発言や行動の原動力とした。明治初期の、政治状況が未だ流動的で、地方財政の基盤も確立していない八戸にあって、地域の展開を主体的に考える人々が、自意識の抛りどころとして受け入れたのがハリストス正教会であった。この抛りどころを得たことによって彼らは、同じ問題意識を共有する会外の人々を結び付け、地域の代表者としての立場での発言や行動を可能に

したのである。このことこそが、明治初期の八戸における、ハリストス正教会の展開の形であつたと捉えることができる。

註

- (1) 表記が「函館」に固定されるのは明治二年（一八六八）のことなので、それまでの表記は「箱館」とする。
- (2) 北郡は、明治十一年（一八七八）郡制施行に伴い上北郡・下北郡に分かれる。
- (3) 二戸郡は最初青森県に属すが、明治九年（一八七六）五月に岩手県に編入。
- (4) 第二章において後述。
- (5) 八戸社会経済史研究会編、工藤欣一執筆『概説八戸の歴史』下巻1（北方春秋社、一九六二）。八戸歴史研究会編集・発行『八戸地域史』第四十二号（二〇〇五）に、工藤欣一の論考として、再録されている。
- (6) 黒田吉則「青森県自由民権期の研究―青森県南部地方における産馬騷擾事件の一考察―」（青森県文化財保護協会八戸支部編『奥南史苑』国書刊行会、一九八九）。
- (7) 佐藤和夫①「近代青森県キリスト教史の研究（その一）」（『弘前大学国史研究』第五十五号 一九七〇）、②「近代青森県キリスト教史の研究（その二）」（『弘前大学国史研究』第五十六号 一九七〇）。
- (8) ニコライ著、中村健之介訳『ニコライの見た幕末日本』（講談社学術文庫 一九七九）。
- (9) 拙稿「ハリストス正教会入信以前―仙台藩士小野莊五郎の日記より―」（『河西英通他編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ―多文化の歴史学と地域史』岩田書院 二〇〇五 所収）。
- (10) ハリストス正教会における用語で、「迫害」を指す。
- (11) 石川喜三郎編『日本正教伝道誌』巻之壹（正教会編輯局 一九〇一）二四九ページ。
- (12) 明治六年を指す。
- (13) 前掲（11）二〇一ページ。
- (14) 「青森県庁所蔵文書」。青森県編・発行『青森県史』第七巻（一九二六）所収。三九〇四五ページ。
- (15) 仙台藩士族のスピリドン大島丈輔を指すと考えられる。
- (16) 前掲（13）。
- (17) 「函館港耶穌教蔓延ニ付為説諭教導職差下ノ件」（北海道立文書館編・発行『北海道立文書館史料集 第三 稟裁録（二）明治五年〜明治六年』一九八七 所収）などにその状況が見られる。
- (18) 盛岡ハリストス正教会所蔵。
- (19) 河原木は川原木、滝蔵は滝三と記載される場合もある。
- (20) 『羽仁もと子著作集第十四巻 半生を語る』（婦人之友社、一九二八初版発行 三八ページ）には、「私の家の祖母の妹婿に当たる人が、後に国会が開かれてから、代議士にも出たような有力者であつたので、祖父はその人を煩わして、仕事の仕方も品行のことも、迷いから覚めるようにはなしてもらったけれど、どうしてもだめであつた。源というその叔父が一日に二度来たことを覚えてい」とある。
- (21) 八戸教育史編さん委員会編『八戸市教育史』上（八戸教育委員会 一九七四）一四五〜一五〇ページ。
- (22) 八戸近代史研究会『きたおうう人物伝 近代化への足跡』（デリーー東北新聞社、一九九五）四六ページ。
- (23) 現地調査による。
- (24) 前掲（21）一二八ページ。
- (25) 前掲（22）四六ページ。

- (26) 「青森県庁所蔵文書」。青森県編・発行『青森県史』第七卷（一九二六）所収。二七二～二七六ページ。
- (27) 同志社大学人文科学研究所所蔵。『教会報知』は明治十年（一八七七）十二月の第一号以来、明治十三年（一八八〇）十一月まで、月二回発行された。以下で引用する『教会報知』は全て同所蔵。
- (28) 『教会報知』第十二号（明治十一年五月二十六日）。
- (29) 前掲（28）。
- (30) ニコライ著、中村健之介訳『明治日本のハリストス正教会—ニコライの報告書』（教文館、一九九三）五一ページ。
- (31) 『教会報知』第十七号（明治十一年十月六日）。
- (32) 『教会報知』第十九号（明治十一年十一月三日）。
- (33) 『教会報知』第九号（明治十一年四月六日）。
- (34) 「大日本正教会議事録」（明治十二年）盛岡ハリストス正教会所蔵。一四八ページ。
- (35) 小野久三『青森県政治史（一）』（東奥日報社出版部 一九六五）四九六ページ。
- (36) 『自由党史 中』（岩波文庫 一九五八）二九ページ。
- (37) 『教会報知』第十四号（明治十一年六月二十三日）。
- (38) 宣教師ニコライ著、中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』第2巻（教文館 二〇〇七）六二ページ。
- (39) 『教会報知』第二十三号（明治十一年十二月二十九日）。
- (40) 『教会報知』第十七号（明治十一年十月六日）。
- (41) 明治十年（一八七七）八戸に青森県師範学校分校が開設し、予科が設置された。明治十三年（一八八〇）に予科が速成科に改組するが、翌十四年（一八八二）廃校となった。
- (42) 『七一雑報』（明治十一年五月三十一日 第二十二号 雑報社）では次

のように報告されている。

三月十六日の事とかや、弘前教会員の本多斎氏は、秋田県下羽後国大館に赴きて、魯会の山中氏に邂逅し（函館より派出せし人にて、元会津産の医生なれども近年専ら伝道に尽力し居なり）、氏の旅宿に講釈場を開きたれば、聴聞人凡四百三十名も来会ありたる故、二人はこれに氣を得て盛かんに福道を弘布せんとせしに、豈計らんや巡査の妨障にあひ思ふままに果し得ざりけり（後略）。

- (43) 「大日本正教会公会議事録」（明治十三年七月 東京降誕会）盛岡ハリストス正教会所蔵。

(44) これはイオアン石橋源六という信徒についての記事である。イオアン石橋は、八戸藩の御用商人であった西町屋石橋家の一族と考えられる。西町屋の先代石橋寿備は、北海道に渡って神官となり、教導職活動に従事していたが、この時期、八戸に戻り、八戸において教導職活動を行なっていたことが、『西町屋文書』（八戸市博物館所蔵）により判明する。そのため、ここで「神道ナル本家」と記されているのは、石橋寿備を指しているものと推測できる。

- (45) 中里進編『ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 八戸』（国書刊行会 一九八〇）一五ページ。

(46) 「地所売買地券御書換願 源晟所有の耕地を岩泉正意買受けにつき地券名義書換願と許可」（『八戸南部家文書目録（新）』八戸市立図書館所蔵）。

- (47) 『教会報知』第二十九号（明治十二年五月四日）。

- (48) 前掲（47）。

（やました・すみれ 筑波大学人間総合科学等支援室人間系支援室

技術補佐員）